読売新聞 西日本版
2009. 6. 20.
（第3種郵便物認可）

精神的支え、情報源に
「闘病記」図書館で脚光

病を抱える人が体験をつづった「闘病記」が、患者、医療関係者の心のよりどころや教材、情報源にもなる、として改めて注目されている。公共図書館ではこれまで、エッセー、医療などに分類されていたが、闘病記として書架にまとめ、文庫化する動きも広がっている。（山畑洋二）

闘病記は痛みや苦しさなど医師に話せない本音が書かれている。家族や医療関係者との接し方、治療費や入院期間の実情など役に立つ情報も詰まっている。

がんを告知されながら受験勉強を続けた18歳の青年の場合、一進一退の病状、両親や同級生らの励ましなどを克明に記した。慢性疾患から両足を切断し、車いす生活を送った男性は、病院や行政窓口の対応について問題提起した。

闘病記を研究する大阪府立大看護学部講師の和田恵美子さんは「検査結果をどう受け止め、生かすかなど、先人の経験は患者の参考になる。医療サービスを提供する側からは、見えない課題が分かることもある」と話す。

同大羽曳野キャンパスの図書館にある闘病記文庫「さくらんぼ」には、胃がん、うつなど病名ごとに整理された約1000冊が並ぶ。一般にも貸し出され、4月の貸し出しは延べ193冊に及んだ。看護学生からも「患者の立場を理解するために読みたい」との声が上がる。

病名ごとに闘病記が並ぶ「さくらんぼ」（大阪府羽曳野市の府立大で）

闘病記文庫のすそ野を広げたのは、東京医科歯科大の石井保志さんら図書館職員が中心の研究グループ「健康情報棚プロジェクト」だ。2004年に設立後、石井さんは「題に病名のない本は探しにくいが、闘病記という新分類でまとめると利用しやすくなる」などと、病院や公共図書館に文庫設置を促してきた。

06年夏に「闘病記文庫」を設けた鳥取県立図書館は現在約1500冊を収蔵し、貸し出しは毎月200冊以上に。乳がんやリウマチの患者会の会報も収集している。また、広島市立中央図書館は約1200冊を集めるなど、闘病記文庫は全国約80図書館にある。

便利なウェブサイトもある。「闘病記ライブラリー」（http://toubyoki.info/）は病気を12に分類し、計約7000冊の情報を検索できる。月平均約5000件のアクセスがあるといい、運営するNPO法人代表の高野明彦・国立情報学研究所教授は「病気とどう向き合うか、という精神的な指針も探せる」と話す。

鈴木晃仁・慶応大教授（医学史）は「同病の患者を励まし、病気や生活の全体像を伝える媒体であり、若い医療関係者の医学・看護学教育の教材としても使える」と指摘。読み物とされてきた闘病記の活用範囲の広さを強調する。

日々のやりとり あふれる臨場感

闘病記文庫に並ぶ本の多くは、自費出版本だ。同じ病気の患者らの心の支えになるとされている本には、事実関係の正確な記述などいくつかの共通点がある、と多くの闘病記出版にかかわった編集者の金井一弘さん＝写真＝は話す。

「優れた闘病記は、いずれも筆者が自己満足に陥ることなく、第三者である読者を意識している」とする。具体的には、▽虚構を入れず、事実を書いている▽聞きかじった医学知識に終始せず、生活全体を描いている▽医療関係者や家族らとのふれあい、口論なども含め、日々のやりとりなど人間的な要素を書き込んでいる――など。

日々の出来事や思いを日記やメモ、録音機などに丹念に記録し、その蓄積から抜粋、構築した作品には臨場感がある、という。

執筆を考えている人への助言として、金井さんは「伝えたいことは何か、をじっくり考え、飾らず、ごまかさず、ありのまま吐露」を挙げた。

くらし 家庭

ぼろアパートに住む30歳代女性。夫はとてもケチ。車には乗らず週末は徒歩で激安スーパーをはしごし、口から眺めるだけで帰ったのは悲しかったです。

共働きで子どもはいません。経済的には余裕があるのに、そこまでケチになる